

コロナ対応外出自粛中に学ぶ④

第4回 小倉（幕長）戦争

はじめに

高杉晋作は、文久2年（1862）に、中国の上海へ渡り、イギリスなどヨーロッパから半植民地のようにされている姿を見たことによって、日本も植民地にされてはいけない、そのためには、江戸幕府を一刻も早く倒し、新しい近代社会を創造しなければ、と決断しました。それは、自分の名前を「東行」と名乗り、東へ行き幕府を倒す。というほどのものでした。

幕府を倒す最初の戦いともいえるのが、関門海峡を挟んで対岸の北九州、小倉藩を倒す戦いで、幕府と長州が戦ったことから「幕長戦争」と呼ばれています。

●幕府軍と戦うことに

高杉晋作が、功山寺で回天義挙の挙兵。続いて大田絵堂において、萩からの俗論党と戦い勝利したことによって、長州藩の進むべき方向が、倒幕へと統一されました。

第二次幕長戦争で、石州口・小瀬川口・大島口、に加えて小倉口の4ヶ所で、幕府軍と戦うことになりました。

大島口は、幕府軍によって戦況は負け戦でしたが、高杉晋作は、6月10日に下関を出航して、12日に防府三田尻を経て、夜、幕府の軍艦に近づき、攻撃をすると、予期していなかったことで、あわてて、退散したため大島口は勝利しました。

このとき乗っていた船は、この年の5月に長崎で、グラバーから独断で購入した鉄張製蒸気船「丙寅丸」というアームストロング砲を備えた船。長さ37呎、94トン、39、205両でした。大金であったことから、藩は、撫育金（通常の経費からではなく、特別の時に使うために蓄えていたお金）で支払いました。

当時、幕府軍は、全国から32の藩、10万人が動員されていましたが、長州軍は、4箇所を合計して、1万人でした。高杉晋作は、6月6日に海軍総督になりましたが、丙寅丸・乙丑丸（木造蒸気船）のほか、庚申丸・癸亥丸、丙辰丸は、木造帆船でした。これに対し、幕府軍は、富士山丸（長さ68呎、1000トン、砲12門装備）をアメリカから購入していました。

小倉口での戦いは、小倉・柳川・肥後・久留米・唐津藩で兵力は、2万人。対する長州は、奇兵隊と長府藩の報国隊で、1,000人でした。

時は、慶応2年（1866）6月18日、小倉藩が長州に攻めてくるとの情報があつたとき、先手をうって、前日の17日に、高杉晋作を先頭に戦いが始まりました。

6月17日は、丙寅丸、癸亥丸、丙辰丸の3隻で、田野浦を艦砲射撃、のち港内の船や人家を焼きました。乙丑丸、庚申丸は、門司浦で艦砲射撃。上陸した長州兵を援護しました。

坂本龍馬は、乙丑丸から見て、小倉藩の兵は、戦闘技術が未熟で、その進退は見苦しい、甲冑に身を固め、弓矢やヤリを担ぎ、足軽の鉄砲も火縄銃。古色蒼然とした姿。長州藩は最新のミニエー銃を装備、300余人の上陸部隊は、1000人余の小倉藩の兵を各所で撃破しました。

●軍事規則の制定

その戦いの前、慶応2年（1866）6月5日、奇兵隊に対し、吉田から一の宮へ向けて移動命令が発せられました。実戦に備えての出陣命令でした。※現在の吉田町から新下関駅あたりへ移動

- ① 行軍中、隊列を離れてはならない。また、必要のない話をしてはならない。常に静かに歩き、不意の敵襲に備えること。
- ② 行軍中笛の合図があった時は、前の組から順次後組へ笛を受け継ぎ、最後の組でとめること。
- ③ 大小便その他やむを得ない急用のあるとき、隊員はまず組長に届け出て、組長はそのことを隊長に届ける。許可を得た場合でも、隊長は隊列から300メートル以上離れることは許されない。
- ④ 行軍中、たとえどのような変事が起ろうとも、理由もなく心を乱してはならない。全てのことについて、本陣からの指示を待って行動すべきである。
- ⑤ これまで定められている軍令に対し、決してそむいてはならない。

上の条々は、固く相守ること。若しこれに背いた者がいれば、軍法に照らして処罰する。

※これは、画期的な法令でした。集団が一隊となって移動することを原則としたもので、西洋式の近代的軍隊への成長過程をみることができます。

●坂本龍馬手紙、海戦図の説明

6月17日の海戦のとき、坂本龍馬は、坂本権平（兄か）あてに、関門海峡の状況を手紙に書いて報告しています。長州が薩摩藩名義で購入した船を、坂本龍馬は、長崎から運んできたときです。船の名前は、ユニオン号、次に桜島丸(後に乙丑丸)で、前年の10月以降、坂本龍馬がこの船を使っていました、この船には、薩摩から返ってきた、お米500石が乗せてありました。(長州が軍備を薩摩名義で購入してくれたことへの謝礼で、薩摩へお礼に届けましたが、薩摩藩は受け取りませんでした。長州藩も、いったんお礼にしてお米を受け取りませんでした。従って、運んだ坂本龍馬が所有することになりました)

手紙の絵図の中には、次のような書き込みがあります。

- ① ここに小倉の蒸気船肥後蒸気船幕蒸気船など出たり引込たりしておれども なに故にや。
- ② 桜島という蒸気船、長州の軍艦を引く、すなわち龍船将（龍は、坂本龍馬船長のこと）
- ③ 長州の軍船 弾二十ばかり当たる
- ④ 長府方諸隊小船にて渡り陸戦す。銃の音ゴママイルように聞こゆ（フライパンでゴマを煎るときに出る音）
- ⑤ ここの山より船の戦いを助けて、大小数発を發せしに、敵上にて、こころよく發して、こころよかし
- ⑥ 7月18日は小倉より長府をせむると聞きより、17日の暁天この方より攻めたり、フントリ（分捕り）には、まず薬など、70長持ち、大砲30門余、その余古流の大砲なり
- ⑦ 長州軍船この船に玉30ばかり当たる、24ポンド以下の玉なり、いかりつな玉のためにきれ、流れるなか
いかりをおろしてとめる
- ⑧ 「オテント」と申す蒸気船高杉晋作船将（高杉晋作が船長）惣じて話と実は相違あり 手紙をさしあげてもまことにはなされぬかもしらず、一度やって見た人なれば話ができる
※坂本龍馬はよく手紙を書いた人で、この戦いのとき関門海峡に来ていたため、地図を書いて、高知の兄に送っています。しかし、想像をして、理解するほかありません。

●門司田野浦庄屋の記録

6月17日の状況を、門司区、田野浦の庄屋 豊田重蔵が記録していました。(一部省略)

- 1、未明より異国船長州船3隻、当沖へ乗参り御茶屋へ大砲打ち込み、備えよりも打ち出し、双方打ち合い九ツ時（正午ころ）前、小倉軍退き楠原を通り、黒川を通り、大里へ退く。長州人田野浦へ上陸、家へ火をかけ、焼き払い候。
- 2、田野浦22軒焼失
- 3、門司へ異船長州人來たり、2隻に乗り組み砲発す。小倉軍は引き下がり、それより上陸、残らず焼き払う。
- 4、拙者居宅土蔵物置残らず焼失。
 ※重蔵の日記は、北九州市立門司図書館に収蔵されています。小倉側の日記は他に存在しない
 そうで貴重なものです。

●「白石正一郎日記」に見る戦況

6月17日

早朝阿弥陀寺蔵のところに勢ぞろい、渡船の船一隻もこれなく。遅刻なり。門司田野浦の海辺へ軍艦2隻あて4隻をもって、未明より大砲を打ちかけ、奇兵隊先鋒田ノ浦へ渡り、並びに長府報国隊よりも渡り、およそ2,300人あい渡り、田野浦焼き払い小倉の斥候、馬上のもの打ち落とし首うち切り、馬を分捕りいたし候。そのうちに昼ころ中軍残らず門司へ渡り、放火いたし、弾薬50余箱大砲野戦砲ろうそくなど分捕り、沢山これあり。夕方に相成り、各帰関 同日よりに入り帰宅。

18日

朝、(大くたびれ)五ツ(午前8時)過ぎ山縣狂介入來高杉晋作を訪ねて來たり候得共高杉晋作居不申直様帰候、夕方奇兵隊中軍教法寺まで手紙遣わし候処最早残らず一の宮へ引取候。

(略)

8月1日

昼前より小倉大火也城内火をかけ候よし高杉山縣大里へ渡り候由夕方帰り來る。

8月2日、

大里へ渡り直様小倉へ行、小倉市中ことごとく空き家に相成り盗人ことのほか多し、橋の本大坂やを本陣として昼飯相仕舞、(略)所々見分室町人家焼亡夕方火の手はなはだし、今夜長浜へ本陣をかまえ休息、分捕の武器大砲野戦砲小銃弾兵糧米などことごとく、これを取り、分捕り諸品はなはだ多し。

8月3日

(略)高杉へ申して、富野林宅へ罷出見候処勿論皆逃げ去り盗人共昨今乱入雑具をあらし候由、報国隊のものと相見え一人、辛漬沢山持退候処を小生見咎めしかり候処そのままおきて逃げ去り富野下男共男女56人出來り。

高杉はじめ総監そのほか富のへ入來、その後一同引取りそのとき左の足少々タガイ候故、皆々は延命寺へ行き候へ共小生は一人そろそろ大里へ出かけ夜五時半(夜9時)大里乗船四つ(夜10時)帰宅、今夜足痛甚だし。

8月8日

過2日、小倉渡海の節書物20箱ほど軸もの5ふく、分捕りいたし候由、(略)

※この時持ち帰った書物(20箱)、分捕りとは、戦利品として持って帰ったもので、思永館(小倉藩の藩校)の所蔵印のあるもので、奇兵隊の隊士は、のちにこれをつかって勉強しています。

8月17日

昼より高杉そのほかと小倉へ行く、夕方、広寿山本陣へ着今日長府世子君広寿の本陣へ御出有之由酒肴御みやげあり、その残りにて一酌、今日、船中へ魚御船に飛び入り候由吉祥なり、(略) 狸山にも賊兵出て合戦に及び味方死去一人、

8月22日

今昼ふくにて一酌、寺内佐世入来高杉へ有談。(略) ※このころふく料理を食べていたことがわかります。

8月25日

高杉22日よりおうの共馬関行未帰らず、夜遅く高杉帰り来る。※おうのは、後の「梅処尼」です。

9月4日

夜に入り、高杉痰に血交り出候故医者石田迎えに遣わす病院よりも一人来る。※高杉晋作が結核で血を吐いていたことがわかります。

9月12日

高杉昼過ぎ駕籠にて馬関入江へ行おうのも行。

※白石正一郎は、高杉晋作を心身ともに助けた人で、この日記は、幕末史を語る貴重な内容で、下関指定文化財です。

●総督・高杉晋作の作戦図

小倉戦争に際して、総督をつとめた高杉晋作は、5本の指図書を残し、全て東行庵に保存されています。そのうち慶応2年(1866)7月2日の大要は、次のとおりです。

- 1、文字(門司)山間の平地を見立て本陣となし、城山(和布刈)の峰へ斥候を差しおくべきこと。
- 2、早とも砲台大砲すえつけのこと。
- 3、彦島の儀は、西門第一の要所、弟子待・山床へ速やかに巨砲をすえつけ、砲手常に出張。陸兵近辺賊船の砲火を受けざるの地に潜伏し、申し合わせて揚陸の賊徒を掃じようすべし。
- 4、海軍、大里沖へ乗り出し、賊兵襲い来らば彦島砲台より十字射をなすべし。
- 5、田の浦沖へ軍艦一隻停泊これありたきこと。
- 6、渡海の第一決の上は、その暁天より彦島砲台開砲、大里賊兵の屯所野戦砲台など十分に撃破すべし。そのとき、陸軍の先鋒は、道崎(亀山神社下)より乗船、白木崎(大里)より登陸、海手山手両道より進撃、すぐさま野戦砲台を築き…。
- 7、小倉城を落さんと欲せば先ず富の台を乗取る策、大里口より進撃するは最下策なり、正々堂々曾根口より進むを中策とす。ひよどり越の古智に習い霧峰(足立山)よりさか落しをなし、その不意に出すを上策とす。かくの如くするときは、富の台は十分に乗取るべし。
- 8、シハクダ(裏門司・柄杓田)という浦用意の漁船三百隻ばかりこれある分、速やかに焼き払うべし。

(一部省略)

次の日、7月3日は、七ツ時(午前四時)を期して、長州軍は門司浦に上陸して進軍。激しく戦った。大里の陣屋や家を焼き、大砲を奪うなど、戦果をあげて、夕方馬関に帰っています。

●将軍家茂急逝

7月27日の肥後藩との一戦で大敗を喫しましたが、思わぬことが展開しました。

将軍家茂が急逝（7月20日）したことの知らせを受けた、幕府軍の小倉方面軍の総督・小笠原壱岐守長行（ながみち）が、30日に小倉を離れました。また、同日、当初から戦意のない幕府に不信感を抱いていた肥後藩が戦線を離脱、久留米、柳川もそれに続いて撤兵を始めました。

結果、孤立した小倉藩兵は、小倉城を自から火をつけ炎焼し、南部の香春町へと退却してしまっただ。長州藩は事実上勝利しました。

●戦利品

○灯籠（東行庵：2対）

- ・清水山への登り口（弘化2年：1845年）に造られ、小倉城にあったもの。
- ・東行庵2階（慶応は、徳川慶喜に応じる、ということから、慶応年代を使うことなく、現実ではない「元治四年」と、彫られています。
- ・太田絵堂の金麗社（美祢市）も同様の灯籠
「元治四年丁卯秋七月立 奇兵隊」と彫られています。

○大太鼓（巖島神社、下関市）

小倉城で時を告げていた太鼓。奇兵隊が戦勝祈願した巖島神社へ奉納。
直径1・1メートル。重さ390キロ。

○書籍（思永館蔵書印あり「思永館本」という：山口大学図書館・県立山口図書館に現在約400冊所蔵）

小倉藩校・思永館の蔵書を戦利品として持ち帰った。

<なぜ、書籍を持ち帰ったのでしょうか>

※吉田松陰が松下村塾で、読書の大切さを教えていた。

- ・吉田松陰は、3年間に約1500冊の本を読み、読書記「野山獄読書記」に年月日・本の題名を全て記録していた。

記述された内容の一部は、次のとおりです。

入牢後、最初の記録は、

「蒙求三冊

延喜式五十冊 十一月十七日卒業 二十七日返し了る

史徴八冊 卒業 返す」

このように、詳細に記録されています。「卒業」は、読み終わったことを示しています。

吉田松陰の教え

- ・松下村塾の聯（れん）に、
「自非読萬卷書 寧得為千秋人」万巻の書を読むにあらざるよりは、
いづくんぞ千秋の人たるを得ん
「自非軽一己勞 寧得致兆民安」一己の勞を軽んずるにあらざるよりは、
いづくんぞ兆民の安きを致すを得ん
- ・言葉の意味は、多くの書物を読まないで、後世に名を残す人にはなれない。
- ・自分ひとりの労力を惜しむようでは 多くの人を幸せにすることはできない。というもの。

※高杉晋作は、3年間家にこもって、本を読みたいといていた。（佐久間象山と対談後）
江戸にいる久坂玄瑞に手紙を出し、このように記しています。

彼も、読書などで学び漢詩を、約300編も作り、『東行詩集』にまとめられています。

●小倉：幕長戦争の戦跡地

・慶応丙寅激戦の址

北九州市赤坂2丁目の赤坂東公園には、この地が激戦地だったことを示す「慶応丙寅激戦の址」碑があります。碑の概要は「敵は東西の両台場から一斉に砲撃して来る。このとき八丁越に向かっていた山田の隊が駆け上がって来る。肥後勢の永嶺雲七などが力をつくして防戦につとめる。山田はきづ口から流れ出る血で全身を染めながら、永嶺が守る台場の手前6間（約10メートル）ほどのところへたどりついたとき、永嶺が放った銃弾に頭を打ちぬかれて倒れると同時に、1、2間下のところがり落ちた。山田につづいて、柏村作右衛門、松原酒造之助、など6名が戦死した。

・長州奇兵隊墓所

赤坂一丁目で、国道3号の崖上に位置している。「長州奇兵隊戦死墓」と刻まれたものなど4本の墓標が建っている。説明版には、「長州藩と幕府軍が戦った長州戦争で、この付近が肥後藩と長州奇兵隊山田鵬輔隊との熾烈を極めた戦いの地である。長州軍は山田隊長以下数人の戦死者を出し、遺体を收容できないまま、大里へと引き揚げた。翌日、小倉の庄屋たちが集まり遺体を火葬にしたが、そのままにして帰ってしまった。そこで、肥後藩の横井小楠は、放置された遺骨を集め、＜防長戦死之塚＞という木柱を建てて、手厚く葬った。明治元年、木戸孝允は、遺骨を下関の奇兵隊墓地に移すよう依頼した。話を耳にした横井小楠は、墓を移すのは肥後藩の気持ちを無視するもので、遺憾であると述べた。木戸孝允は移転をあきらめ、下関の僧侶田中芝玉をこの地に派遣し、墓を守らせた。芝玉は、海峡を隔てて、下関をよく望むことができるこの地に墓を移すとともに、現在の石の墓標に建て替え、墓守をし、ねんごろに葬った。この戦没者のお墓は、下関の本行寺に祭られています。



(長州奇兵隊戦死墓：北九州市赤坂)

●戦争の終結へ

慶応2年（1866）10月13日夜、長州藩の占領地である小倉藩領の沼田地区の民家へ、「止戦交渉申し入れ書」が投げ込まれていました。その内容は、

両藩の止戦について、藩府本部で話し合いが行われていることは、ご承知のことと思います。そ

ここで、現地におきましても、当方から軍使を差し出し、話し合いを行いたいと思いますので、現地においての止戦協議開催を御受諾くださいますかどうか、ご返事をお待ちしています。

小倉先鋒 軍事掛

長州御出張御軍事 御役人中様

長州藩と小倉藩との講和交渉は、山口にいて進められていたが、現地の治安維持は、戦場の地で合議することが望まれ、このような申し入れが行われていました。

こうして、10月15日、上曽根町の、浄土寺で、会議が開催され、山縣有朋などが出席していました。

この交渉で、金辺峠・高台竜鼻・ミチヒ峠・筑前本道・合馬村筑前境・行司口外を引き渡すので、止戦してほしいとの要望がありました。

結果として、慶応2年（1866）12月28日、講和条約書が、小笠原近江守から出されました。そして、最終的には、次の年、3月28日に「講和条約書」が交わされました。

内容は、

今度、藩主は朝廷・幕府の命令に従い、貴藩と講和条約を結ぶことになった。このようなことは、多くの藩民を塗炭の苦しみから救うためである。これというのも、見込み違いの戦争を始めたためであると、深く後悔している。今後において戦争を起こすような者がいるなら、何度も論争を重ねて、決して出兵しないことを堅く誓うものである。

慶応3年3月28日

小笠原出雲

長匡 花押

外5名連署

毛利筑前様

外2名

これをもって、講和が成立した。戦局は、鳥羽・伏見を経て、北越へと向かうことになりました。

●龍馬は、お龍と下関へ

慶応3年（1867）2月10日、小倉藩との終戦協定が終結するころ、龍馬は、長崎から、妻のお龍をつれて下関市阿弥陀寺町の伊藤九三宅（現在：春帆楼下）に住居を移しました。

当時の伊藤家は、2000坪にも及ぶ大邸宅（部屋数20余、畳数200枚余、ほかに板間など）龍馬夫妻は、3畳の板の間が提供され、部屋の名前は「自然堂」と呼ばれていました。

伊藤家では、春、歌会があり、龍馬とお龍が次のように詠んでいます。

こころから のどけくもあるか 野辺は猶 雪げながらの 春風ぞ吹く (龍馬)

薄墨の 雲と見る間に 筆の山 門司の浦はに そそぐ夕立 (龍)

その後、龍馬は長崎へ、また兵庫、京都などへ東奔西走。5月8日、三吉慎蔵に「万一の際には、お龍の後事を託す」旨の手紙を出しています。この手紙が実質、遺言状になり、龍馬は、11月15日、京都の潜居先「近江屋」で凶刃に倒れています。